

アトピー性皮膚炎のケア

最新治療を支える看護

特集にあたって

増えていく治療の選択肢に向け、新たなケアを創り出す

アトピー性皮膚炎は一般的に日常診療でもよく遭遇する疾患といわれていますが、最近では多くの新規薬剤が開発され、治療の变革が起こっています。

アトピー性皮膚炎の治療には分子標的薬が登場し、治療の選択肢が増えました。少し前までのアトピー性皮膚炎の看護といえば、患者や家族が正しくスキンケアを行えるように患者教育を行うことでした。また、皮膚が悪化する要因を見極め、患者や家族と共に肌に優しい生活環境を整えながら、炎症やかゆみの少ない皮膚を目指していました。

国内でアトピー性皮膚炎に対する分子標的薬が承認されてから、その対象年齢は加速的に拡大しています。看護師は、この変化のスピードに取り残されないようにしなければなりません。加えて、新たな治療に合わせた看護を創り出すことが求められています。例えば、注射による薬物投与には痛みが伴います。これまでアトピー性皮膚炎の症状緩和の中心は「かゆみ」でしたが、定期的に注射を受ける患者には「痛み」への対応が求められています。そして治療の選択肢が増えたことで、こどもの意思決定支援を再考する時期にきています。

筆者が出会ったある高校生の患者は、重度のアトピー性皮膚炎で、小学生のころから症状が悪化すると日常生活が困難になり、入院を繰り返していました。分子標的薬を始めたときの心境について、「小学生のころからスキンケアをしなければならないことはわかっていたが、毎日継続することが難しかった。できない自分に対する負い目よりも、スキンケアをしていないことを医療者に報告することへの罪悪感が強かった。だから、新しい治療(分子標的薬)を始めてからはスキンケアが簡単になり、罪悪感から解放されて感謝している」と話してくれました。

この患者には、計画通りに行動することが苦手な特性があり、一時は学校生活を送ることが難しい時期もありました。時間をかけながら少しずつ社会生活になじんでいます。ほかの人と同じペースで行動することが苦手で、スキンケアを毎日続けることはハードルの高い治療だと思います。私たち看護師は患者の意思を尊重する支援を心がけていますが、患者は医療者の期待に応えたいと考えていることを教えられました。また同時に、治療の選択肢が限られると抜け出す道が見つからず、苦しくなることも知りました。

治療の選択肢が増えたことは、患者のニーズに合わせた治療の実現を容易にします。医療者としては、患者が納得して治療に参加できるように支援したいと考えます。そして、アトピー性皮膚炎の治療の基本は、薬物療法・スキンケア・悪化要因への対策という点で変わっていません。それゆえに、患者や家族が正しい情報を得て、従来の治療とのバランスを取りながら新しい治療を行えるよう支援することが求められています。

本特集では、看護師がアトピー性皮膚炎に関する知識をアップデートし、エビデンスのあるケアを学び、新たなケアを創り出すヒントにつなげていただくことを期待して、サブタイトルを「最新治療を支える看護」としました。読者の皆さんには本特集をご一読いただき、アトピー性皮膚炎のケアを創造する一助としていただければ幸いです。

※本特集で紹介した事例は、ご本人およびご家族の承諾をいただいています。

金子恵美 Kaneko Emi

国立病院機構福岡病院看護部、同院アレルギーセンター／
小児看護専門看護師、小児アレルギーエドゥケーター